



開発第1号のユニット金型。型の部分だけ交換できる画期的な製品。

ものづくりの盛んなしながら、昔から多くのまち工場がある。旗の台駅にほど近い新興セルビックも、そんな小さな金型の工場のひとつだ。しかしこの会社、やはり小さくてもやっていることはすごい。次から次へと画期的な新製品を開発し、アメリカやインドなど海外からの視察が後を絶たないというのだ。取得した特許も数知れず、特許証も途中から額に入れるのが面倒になり、本棚に無造作に突っ込んであるという始末。この膨大な開発をぐいぐいと引っ張ってきたのが社長の竹内宏さんだ。

も経営が苦しかった。それで何をすべきかじーっと考えて、開発を始めたんです。ピンチに直面した竹内さんは、新しい開発をどんどん行うという、思いつき前向きな方向へと進み始めたのだ。

それから竹内さんの快進撃がはじまった。年に4つ5つというハイペースで新製品を発表し続けたのだ。「最初はアイデアが行き詰まったらどうしよう」と不安でした。でも、業界誌に新製品を発表し続けているとかなり目立つらしく、アイデアを持った人たちがどんどん集まってきたんですよ」と竹内さんは当時を振り返る。こうして集まってきた人たちとアイデア工房という開発集団をつくった。メンバーは研究者や職人など専門はさまざま。竹内さんは「専門の違う人が集まるといろいろな方向から考えられるから、柔軟な開発ができる。職人の知恵のすばらしさを生かして、現場発の新製品をどんどん作りたいですね」と意欲満々だ。

つ紹介しよう。家電の部品を金型でつくると、プラモデルのように、素材を流し込んだ通路が残ってしまう。プラモデルの場合はこの通路をわざと残しているが、部品を作る際にはこれを取り除かなくてはならない。「部品工場の人が、通路をニッパでいちいち切っている姿を見てね、通路を自動的に切り取れる金型があったら便利だろうな」と思ったんです。竹内さんは、そのためのしかけとして普通は四角い金型の土台を丸い形にした。外側から型に金属を流し込み、くると回転させる。すると型の流し口に取り付けた刃物が、いろいろな通路を自動的にカットする。これにはお客さんも驚いたそうだ。

「町工場はだいたい受け身の姿勢が多いんですよ。でもよく考えてみると図面が引けて、ものをつくる技術があるということとは、実はすごい強みなんですよ。他社に頼らず開発ができるから、その気になればいつでも発信する側にまわれる。そうするとね、受け身だったころの経験がものすごく生きてくるんですよ」。竹内さんは、多くの工場がものづくりの技術を生かして、もっと独自の開発に取り組みできればと願っているようだ。



そもそも金型は、同量生産するためにひとつひとつ作るかわりに、それでバカバカというわけだ。簡単に同じ原理だ。ひと昔前型をつくる職人芸があった。しかし、最近は機械うになり、工場の仕事内してきた。



こんなものがあつたら、 きっと便利だろうな。異色の 金型開発の舞台裏。

株式会社新興セルビック 竹内宏さん (旗の台3丁目)

ホームページ <http://www.sellbic.com>